

【論文】

カリブ海とロビンソン・クルーソー物語（４）

磯 山 甚 一

The Caribbean Sea and the Robinson Crusoe Story (4)

ISOYAMA, Jinichi

要旨：今回はロビンソン・クルーソー物語のなかでその島に住む人々が増えていったときに何が起きたのかを考える。そのための視点として、この物語に現われる様々な境界をめぐる言説をとりあげて、その言説によって表現される意識が今日のわれわれの境界意識とはかなり異質のものであることを確認する。その確認作業によって、われわれがこの物語を読むときにあまりにも今日的な意味を読み込んでしまうことの危険が明らかになるであろう。境界の例としては、陸地を隔て、人々を隔てる海が重要である。ヨーロッパ人口ロビンソン・クルーソーとカリブ海の先住民カリブ族インディアンとの間の実際の境界、および相互の境界意識、島に定住することになったヨーロッパ人たちが島という政治体の内側において抱く民族的境界や宗教的境界の意識がある。

キーワード：カリブ族、蛮人、境界、民族、commonwealth

境界意識

ロビンソン・クルーソーがたどり着いて暮らしていた島は彼以外に住居を構える人のいない無人島であったが、無人島の物語が一定期間を過ぎると、一転してその島にはさまざまな人が次々と足を踏み入れる。やがて、そこを生活の拠点として定住する人々さえも次第に増加していくことになる。その過程でその島にはいったい何が起きているのか。

まず、島の住民がどのように増加していったのかおさらいをしておこう。ロビンソン・クルーソーが島で一人きりの生活をしたのは、彼が島に漂着してから24年間であった。その24年が経過した年になって、ひとりのカリブ族の若者と出会ったことから、その若者をフライデイと名づけて二人で共同生活を始めたのである。二人の共同生活が4年間を経過したところで、そのフライデイの父親が加わり、さらに一人のスペイン人が共同生活に加わる。

続いて、イギリス船が島の近くに到着し、ロビンソン・クルーソーはその船に乗り込んでイングランドに帰ることになる。彼がその島を後にしたあと、島にはそのイギリス船を降りた5人のイギリス人が残留して島で生活を続ける。

いったんヨーロッパに帰ったロビンソン・クルーソーはやがて再びその島を訪れることを決意して大西洋を航海する船に乗る。出航に際して彼は、大工、鍛冶屋、器用な男、そして仕立屋を一緒に連れて行く。それらの職人たちは、島で滞在することを予定している。

その航海の途上ロビンソン・クルーソーは漂流していたフランス商船を見つけて救助する。その船の乗組員4人が彼の船に乗り込み、彼に同行して島に向かうことになる。さらにプリストルの船も発見し、その船の乗員2人が彼に同行し、島に向かう。

彼が島に到着すると、16人のスペイン人たちが島に新たに到着しており、そこに残留していた5人のイギリス人たちとともに暮らしていた。そのほかに捕虜になった3人のインディアンがいたばかりでなく、さらに3人のインディアン男性とともに5人のインディアン女性が捕虜となっていた。それらの5人のインディアン女性たちは、5人のイギリス人たちの妻となっており、すでに子どもが20人くらいいたのである。

その後にインディアンが島を襲撃した際には、その襲撃に参加して島にやってきたインディアンのうち、37人がそのまま島に残って生活することになった。

カリブ海とロビンソン・クルーソー物語（４）

これらをすべて合算すると、最終的に島の人口は大人が73人、加えて20人くらいの子どもたちということになり、ロビンソン・クルーソーの島における定住人口の増加ぶりは、実にめざましいものがあったことになる。その後の航海でブラジルに立ち寄ったときには、島に連れて行ってスペイン人たちと結婚させる予定で3人のポルトガル人の女性を探し出す。

ロビンソン・クルーソーが最終的に立ち去ろうとする少し前にその島で多くの人々が共同で生活する様子を描写して彼が用いる言葉はcommonwealthである。この語は邦訳で「共和国」（平井正穂訳『ロビンソン・クルーソー』下205ページ、以下（下205）のように表記）となっているが、後で詳しく検討することになる。

以上のような過程で人口が増えていった島において、ではいったい何が起こったと考えればいいのか。以下で、その島をめぐる「境界」の意識がどのようにとらえられているかを視点にしてみよう。すなわち、その島に複数の人間が集団として共同の生活をすることによって、その集団の内側の空間や、その集団と他の集団の関係をめぐって、内と外、こちらとあちら、自分と他者、私と公などの意識が生まれ、必然的に境界が意識されるからである。いうまでもなくこれらの境界は相対的なもので、ある人にとって内であるものが、別の人にとっては外であることは自明である。たとえばロビンソン・クルーソーがその島を自分の島だと宣言し、自分がその島の内側にいると主張したとしたら、その島一帯に以前から住んでいたという先住民カリブ族の人々にとってその島が外部に変貌したことになる。それまでは自分たちの内部に属する島だったにもかかわらず、である。

1. 「冒険」をはばむ海

ロビンソン・クルーソーがイングランドで暮らしていた当時は、そのイングランドを取り囲む海が彼を行動へと駆り立てた。たとえその海でどんな災難に遭ったあとであっても、彼の父親でさえ彼の海へ行きたいという

欲望を押しとどめることはけっしてできないのであって、消去不能な所与としてその欲望は存在している。すでに第 章で考察したとおり、彼にとって海に出ることは「冒険」であった。海はそこで何が起こるかわからない、予期できないことが起こる境界の確定しない空間として存在している。そのような海の冒険は死をもたらず危険も大きいことはいうまでもない。あえて陸と海の境界を越えて海に出て行こうというロビンソン・クルーソーは越境者として特別な地位が与えられている。彼の父親もやはり大陸のブレイメン出身となっており、イングランドに住み着いた越境者であったことを注目しておいていいだろう。

物語としての言説を構成する次元に焦点をあてて同じことを言うならば、海に行こうという彼の意思は「冒険」の物語を進行させる駆動力となっている。海がそこにあることで、冒険への彼の衝動がうまれる。したがって物語が生まれる。ロビンソン・クルーソーという人物名は、その欲望を人間の行動として具現化し文字として記述するために必要な、物語の装置とも言える。この装置によって、ロビンソン・クルーソーの物語という言説が組織される。

ある行為を文章として記述するにはその行為の主語となるべき固有名詞が必要だというのは、容易にわかるであろう。ちょうど、英文学史上ロビンソン・クルーソー物語と同じ18世紀に流行したピカレスク（悪漢小説）における主人公のピカロにとって、物語を進行させるために旅にでることがその人物の存在理由であるのと似ている。海に出て行く意思があるかぎり、ロビンソン・クルーソーの物語はいつまでも続くことができる。彼の海に出たいという意思がどんなことをしても押しとどめることができないのは、作品が続くための条件である。

このことは英文学史の記述においても、「ピカロは、……さまざまな諷刺的観察と滑稽な挿話を引き出すための一つの文学的なしきたりなのである」（ワット134）として位置づけられてきた。しかし読む側から考えてみれば、同じことを別の言い方もできる。海を契機にしたさまざまな行為

の主体が、何人かの異なった人物であっても差し支えはないだろうが、それでは物語としてはどうだろうか。それらの行為の主が同一人物となっていることで、それらの行為の間にギャップが生まれ、そのギャップを読者は合理的に説明しようという契機として受け止める。それによって読者の側で心理的な空間が生み出されることになるであろう。

もうひとつ事態を複雑化する事情がある。「原著序」のなかの言葉として、「この中には虚構らしいものはまったくない」（上7）とされているとおり、ロビンソン・クルーソーは、少なくとも初版の段階では、実在の人物という想定であった。だが今日のわれわれは、この物語の作者がロビンソン・クルーソーではない、ロビンソン・クルーソーという人物は実在せず、ダニエル・デフォーという実在の人物が書いたものであると知っている。しかしこのテキストの仕組みでは、作者であるデフォーの名前はテキストの表面から消されようとしていると理解しておく必要がある。つまり、実在する人物であるロビンソン・クルーソーが実際に「冒険」に出会い、その冒険をあとから自分の言葉で文字化したもの、それがその物語であるという虚構を承認しなければならない。その虚構のうえに物語が成り立っている。

ロビンソン・クルーソーが海から陸に上がるとその途端に、そこがインランドであっても、あるいはカリブ海に浮かぶ島であっても、上がった時点において「冒険」は停止する。冒険が停止すれば、その物語の定義上、冒険をする者としてのロビンソン・クルーソーは存在する意味がない。彼が陸にあがってそこにとどまることに決意したときには、冒険の物語は終わり、何か冒険とは別のものになる。これは第 章で見たとおりであり、ひとつの冒険が終わることによって、次の新たな冒険への意思に引き継がれる。そして彼は海へ出て行き、その海にこそ冒険が待ち受けている。海は確かに何が起るかかわからないかもしれないが、それだからこそ、何かを期待させる。彼にとって海は彼の身体の活動範囲を拡大し、したがって、彼の物語を生み出してくれるものであった。

ところが、ロビンソン・クルーソーがカリブ海の孤島で一人の生活を送っていた間には、その周囲を取り囲む海は、同じ海ではあるが、彼にとって冒険を生み出す海とは違った意味を持つようになる。海は相変わらず彼を冒険に誘っていることは確かであるが、その海がかえって彼の冒険をできないようにしている。彼の行動を海が遮断する。島は四方を海に囲まれており、一人きりの彼にとって、そこから脱出する意思は持ち続けるが、実際にその意思を行動に移すことなど、まったく不可能であったからである。彼は島からの脱出を企てて実際に実行に移そうとして、ひとりで船づくりにも挑戦した。海は彼の前に頑として立ちはだかっていた。海は彼の自由な行動をさえぎり彼を島に閉じ込めてしまう、恐ろしくも手ごわい自然として目の前にあった。冒険と自分の間に横たわるその境界を自分の手でどうにかすることなど、まったく不可能である。

すでに述べたように、第一部と第二部を合わせた全体としてロビンソン・クルーソーの物語は「冒険」である。コロンブスの航海から始まった大航海時代を経て18世紀になると、地球上にはヨーロッパ人にとっていまだに未知の領域があることがつぎつぎと明らかになり、世界は果てしなく拡張するように思われた。そういう世界がヨーロッパ人の視野に入りつつあった。そういう拡張する世界についてある種の情報を提供するものとして、一方に「陸上の旅に対応するピカレスク小説」があったのに対して、ロビンソン・クルーソーの物語は「海の旅に対応する航海記」(富山225)であったと受け止めることができるだろう。だが、彼が孤島に滞在した期間には、海はかえって彼の冒険を妨害している。海はむしろ越境者としての彼の本来の活動である航海をできなくしており、彼がその島に滞在していることによって、かえって、本来の冒険物語は進行しない。

しかし、彼が島で活動していることの暗示として、本来の冒険を生み出すはずの海がつねに背後にある。たぶん、そのような海が彼の冒険への意思を抑圧することによって、孤島での生活を細部にわたって記録するように強いる海が読者にとってかえって印象的であったのであろう。

孤島の境界を画する海はロビンソン・クルーソーの「冒険」を妨害している。だからこそ、島の中に閉じ込められてそこに滞在しているロビンソン・クルーソーとは、そのことの暗示として、冒険への欲望、または冒険への可能性として存在している。

2. 「蛮人」を生み出す海

やがてロビンソン・クルーソーは海が自分を隔てているのは、彼の欲望の対象である冒険だけでないと、具体的な存在を目の前にして知ることになる。海が境界となって、その海の彼方の大陸があるいは海域にあるだろう島か、どこか彼の周辺に彼とは別の人間たちが住民として実在していることを知るのである。海はそれらの人間たちと彼を隔てている。しかし同時に、それらの人々はまさにその海を利用してボートに乗り海上を渡ってその島にやってきており、海は彼とそれらの人々を結び付けてもいる。

a. 起源と正当性

ロビンソン・クルーソーとカリブ族と呼ばれる人々の関係を規定する契機となる出来事は何か、島において彼が彼らに対して行う活動を正当であるとして保証するものは何か。

カリブ族の存在をロビンソン・クルーソーが知るきっかけとなったのは、彼が島で生活して15年目にあたる年に海岸で彼が発見した裸足の足跡であった。彼は何者かが海のかなたからやってきてその島に上陸し足跡を残していったと推量した。その後に判明するとおり、その足跡を残していった人間とは、周辺の島、または近くの大陸に住んでいるカリブ族の人間たちである。*The Farther Adventures of Robinson Crusoe*と題された続編では、その人々がカリブ族ではないと訂正されている（下45）とおり、その人々のアイデンティティそのものがこのロビンソン・クルーソー物語の中で揺らいでおり、物語全体にかかわる根本的な問題をはらんでいると思わ

れる。ここではその人々がカリブ族インディアンであるとする、この物語の当初の想定で議論を進める。

彼はこの足跡の発見によって大きな不安に陥れられる。のちの物語の展開から明らかになるとおり、それらカリブ族の人間はこの物語の想定では人肉食をする「野蛮人」となっており、われわれが考える意味の通常の人間的なコミュニケーションが彼との間に結ばれないという思い込みがあるからである。相互の言語的な交渉が成り立つならば、政治的あるいは平和的な回路が成立することになるが、相手は人肉食を食べるような「野蛮」な人間たちで、両者にそういう関係の成立する余地などそもそもありえない、最初からそう仮定されている。

前にも見たとおり、ヨーロッパ人とインディアンの最初の出会いを記録したコロンブスの航海誌にもカリブ族インディアンに関する記述がある。15～16世紀初期の記録である。やがて18世紀になってロビンソン・クルーソー物語にカリブ族インディアンが登場するとき、その物語はコロンブス航海誌に記された出会いの物語の続きとなっているのである。コロンブスの航海誌は事実の記述とされており、ロビンソン・クルーソー物語は虚構である。だが、18世紀に書かれたその物語も、事実の記録として公表された記述である。デグストの前に、あるいはデグスト以前に存在したと仮定されるカリブ族に関する事実の次元ではなく、ヨーロッパ人が試みたカリブ族の「表象」の次元において、続きとなっているということである。そのようなカリブ族の表象が16世紀から18世紀にいたる間にヨーロッパに流通していたこと、それにこそ重要な意味がある。新大陸の「発見」以後、近代化を推進する過程でヨーロッパ人を新大陸へ駆り立てたイデオロギーがその表象に込められた。カリブ族に対するロビンソン・クルーソーの考え方に典型的に表われるイデオロギーである。

カリブ族の人々がほとんど絶滅させられたことによって、カリブ族の側から書かれた歴史が存在しない以上、ヨーロッパが流通させたそれらのカリブ族に関わる表象が事実であるかどうか、カリブ族からの明確な反証は

もはや期待できない。だが、カリブ海域から自分たちの歴史を書こうという試みは始まっている（たとえば、E.ウィリアムズ）。そして、ヨーロッパが流通させたカリブ族の表象が、カリブ族についての事実を伝えているというよりはヨーロッパの都合が生み出した産物に過ぎないことは、次第に確認されつつあると思われるのである。

一例として、Peter Hulme and Neil L. Whitehead, ed. *Wild Majesty: Encounters with Caribs from Columbus to the present day*, anthology (Clarendon Press, 1992) によれば、たとえば16世紀後半のカリブ海域文書にみられるのは、「canybal」や「caribes」の実際のアイデンティティに関する、コロンブスに始まる曖昧な態度」（45）である。カリブ族に関してヨーロッパの言語による表象にそのような揺れが継承されてきた。その伝統のなかに置かれた文書のひとつとしてのロビンソン・クルーソー物語に登場するカリブ族は、部族間の戦争の後に海岸で饗宴を開いて人肉食にふける野蛮な人々という系列に属することになった。人肉食という行為がカニバリズム（cannibalism）として言及されること自体、このカリブ族について記したコロンブスの記述に由来しているのである。

ロビンソン・クルーソー物語において、カリブ族の人々は彼が島に漂着する以前はもちろん、漂着した後も彼の知らない間に繰り返し島にやってくるということが判明する。その島はその人々が人肉食の饗宴に利用する彼らの生活圏の一部だったのである。最初に彼がその人々の様子を目撃するのは、裸足の足跡を見つけてから8年後、島での生活が23年を経過した年であった（上244）。

その後彼は「明けても暮れても殺意にとりつかれていた」（上247）。このヨーロッパ人の側では、カリブ族と思い込んだインディアンに対し、最初に不可解で一方的な「殺意」ありきである。彼らに対しなぜ殺意を抱かなければならないのか、この物語のなかだけで理由付けとなる回答はえられない。

このようなロビンソン・クルーソーの思い込みを理解するには、コロン

ブスに始まり16～17世紀を経て18世紀ヨーロッパに受け継がれたカリブ族インディアン表象の続きとして見なければならぬことは明らかであろう。事実としてカリブ族はそんな殺意を抱かなければならないような人間ではなかったかもしれない。それを確認すべき方法をわれわれは持ち合わせていない。だが、カリブ族とはこちらが殺意を抱くに値する人間、殺すべき人間であるとヨーロッパに伝わっていたということは、ロビンソン・クルーソー物語が明らかにしている。

彼がその殺意を最初に行うのは、カリブ族インディアンの異なる部族間で戦われた戦争の結果として、戦勝者の側が捕虜となった他の部族のカリブ族の人間をその島に連れてきて人肉食の饗宴を開いている場面である。彼はその捕虜の一人が逃げ出したのを目撃して、その捕虜を追っ手から救いだすことに成功する。そのときに救った青年がのちにフライデイと名づけられ、彼の物語に参入する。

ロビンソン・クルーソーはすでにヨーロッパから持ち込んだ火器を自由に使いこなすだけの準備ができていたので、投げ槍などの装備しか持たないカリブ族の人たちはひとたまりもなく殺害される。これは歴史的事実の裏づけがあると想定される描写であろう。「裸で、武器といえば弓と矢しか持たなかったインディオは、スペイン人の弩やナイフ、大砲、騎兵、それにインディオ狩りにとくに訓練された犬などの前には、まったく敵ではなかった」(ウィリアムズ第 巻26)。結果としてこのときの暴力的関係がロビンソン・クルーソーとカリブ族の関係を物語のなかでこれ以後ずっと規定することになる。一方のヨーロッパ人は次元の違う種類の武器火器をそなえていることによって、暴力の関係において先住民の側が敗者になると決まっているのである。

二度目に両者が会うときには、彼らが船に乗って姿を現わして島を目指して来るように見えただけで、彼はそれらの先住民たちを銃によって射殺しようとする(上316～7)。21人のカリブ族の人間が、部族間の戦いが決着のついた後で捕らえた敵方の3人の捕虜を連れて島にやってきたので

カリブ海とロビンソン・クルーソー物語（４）

あった。彼らが人肉食の儀式を行なっているところを彼は襲撃し、殺したカリブ族の人数を記録にとどめる（上317）。彼が島から脱出してヨーロッパに滞在していたあいだにも、島にはカリブ族がやってきたと彼は報告を受ける。「蛮人を満載した丸木舟が二十八隻をくだらず」「その数はおよそ二百五十名に達していた」（下115）。

ロビンソン・クルーソー物語において、彼がそれら人々を殺戮することについて、いかにしてその行為が正当化されているか？ その殺人が正当な行為としてこの物語の読者に理解されるようになっているとすれば、そのテキストにはどんな仕組みがあるのか？ その答えは、二分法の思考である。海岸でその足跡が発見された当初から、その足跡の主と想定される人間たちは、ヨーロッパ人であるロビンソン・クルーソーに対して何かまったく異質なもの、外部の他者とされ、「悪魔よりももっと危険な存在」（上211）と言われ、「蛮人（savage）」という言葉が用いられる。それに対してロビンソン・クルーソーはヨーロッパを代表する人間であり、こちら側の内部に存在している。二分法とはこのように、ヨーロッパとカリブ族の間に境界を設定して、あちらとこちらとして思考する方法である。

ロビンソン・クルーソーにとって、「蛮人」たちが外部からやってくる異質な他者であるとするならば、その「蛮人」たちの側から言えば、ロビンソン・クルーソーこそが、自分たちの内部に外部から侵入してきた他者である。内部と外部という言い方をすれば、それらの相互関係は絶対的なものではなく、どちらが外部でどちらが内部かを定めるべき基準は、彼ら相互にコミュニケーションが成立していない以上、彼らの間には存在していない。

彼らの他者性を表わす典型的な行動として、ヨーロッパ人とカリブ族を対比するために採用され、二分法思考を支持する強力なイメージとなっているのが、人肉食（cannibalism）であり、これもまた、コロンブスの航海誌で記述されたカリブ族の表象を継承している。ロビンソン・クルーソーの言う、「悪魔のような非道残虐な野蛮行為」（上224）である。彼がフラ

イデイと名づけた青年も、二人の間に言語的コミュニケーションが成立しない段階でしきりに人肉を食べたがるような素振り(と彼が解釈する所作)をみせる。その後も何度かロビンソン・クルーソーの島を訪れる蛮人たちは、島の海岸の砂浜に陣取って、彼が望遠鏡で盗み見るその先でせつせと人肉食の饗宴を開くのである。彼はその人間たちについて、「彼らは大挙してやってきて私を捉えて喰ってしまうだろう」(上212)と考える。後になって彼が自分は一人で島に漂着したときから「他の生きものの餌になる心配が絶えずつきまとっていた」(下38)と述懐するように、島の外部からやってくる人間である「蛮人」たちは彼にとって絶えざる脅威である。ヨーロッパ人については、これらのカリブ族の人間たちと対照的な行動を示すエピソードが紹介される。彼が再びその島を訪れようとして大西洋横断の船に乗った航海の途上、彼は漂流する一艘の船を発見する。その船のなかでは、食料が尽きて餓死者が出るほどの悲惨な状況であった(下41)。そしてその中の一人の女性は人肉さえ食べて生き延びようという気持ちが起こったが、「理性をとりもどしてそんな気持ち」に打ち克ったことが話される(下213)。ヨーロッパ人の場合、もしも理性を失ったような場合でなければ人肉食などするわけがないというわけなのだ。

カリブ族は人の肉を食べる。対照的に、われわれヨーロッパ人は、絶対にそのようなことはしない、という図式は明らかだ。この対照は、最終的に彼がその島を立ち去るまで貫かれており、その対照と、ロビンソン・クルーソー物語における「蛮人」殺害が同時並行的に叙述されていることが重要である。「蛮人」の殺害は第一部で殺された21人に限定されず、第二部になっても繰り返される。第二部では「戦闘」が行なわれ、180名以上の蛮人の殺戮が実行されている(下121)。そのような殺戮行為は、上述のようなヨーロッパ人对蛮人という二分法思考を通じて、「悪魔のような非道残虐な野蛮行為」を常とするカリブ族に対する行為だからこそ暗黙裡に正当化されるという仕組みになっているのである。

だが、テキストの文字面では、相手がヨーロッパ人とは異質の人間たち

である、人肉食をするカニバルであるというだけで彼らを殺戮するだけの十分な理由にはならないと、ロビンソン・クルーソー自身が言っている。「私自身に関するかぎり、彼らには罪はなかった」（上310）。たとえ彼らがカニバリズム（人肉食）という「非道な所業」に浸っているとしても、「私が彼らの所業を裁きいわれはなかった」と語る（上310）。彼は後にマダガスカル島に到着したときには、その住民たちをヨーロッパ人が殺害した行為を「マダガスカルの虐殺（the massacre of Madagascar）」（下257）と呼んで厳しく非難しているのである。自分が加わったカリブ族殺戮は正当化するが、自分が加わらない殺戮は「虐殺」と呼んで非難する。

では、どのように考えればいいのか。ヨーロッパ人とカリブ族との戦いは避けられない、それはすでにいつも前提である。最初にありきだったのは、ヨーロッパ人がカリブ海域に進出しなければならないというヨーロッパ側の一方的な事情である。それこそが優先議題である（「17世紀の危機」については川北『ヨーロッパと近代世界』を参照）。あとは、彼らカリブ族がヨーロッパにとってどうしても相手にして戦わざるをえない人間たちであることを、自分たちの側で生命の危険を冒して戦う人間たちにかにしていかにして納得させるかが問題なのだ。その手続きとして、カリブ族をいかにして表象するかが重要である。実際に彼らがどうであるかは、あまり問題ではない¹⁾。

カニバリズムでさえも、事実でなくともかまわない。実際にカリブ族が人肉食をしたかどうか、実を言えば二次的な問題なのである。「カニバリズムは『境界の外の』現象である」（Jahoda 106）と言われるように、カニバリズムが話題になるときは、その現象を誰がどういう文脈で報告しているかがかかって重要である。ロビンソン・クルーソーの場合に即して言えば、彼がカリブ族のカニバリズムを話題にしていることが重要なのだ。それこそ、ヨーロッパ人とカリブ族の間に厳然とした境界を設定する言説を構成するための、十分に意図的な過程なのである。

現実問題としては、ヨーロッパ人である彼の方は銃という火器を所持し

ており、カリブ海域の先住民である相手はそういうものを何も所持していない。そのような圧倒的な戦力の差があるかぎり、戦う前から帰趨は決まっているのは疑いない。つまり、彼を含むヨーロッパ人はその蛮人たちを殺戮するだけ十分に優越する武器を所持しており、彼らを殺すことに十分な勝算がある。だから殺したのである。カリブ族に対するその殺戮行為および奴隷化は、その島にヨーロッパ人が本格的に進出し植民地として維持するために役立つことは疑いない。

このように暴力の回路において相互関係をもつ二者間に勝者と敗者がいったん決定するやいなや、上記のような内部と外部の区別が事実とはあまりかわりなく絶対的なものとして言説を支配することになる。カリブ海域で勝者となったヨーロッパが一転して内部に転換するとともに、敗者であるカリブ族の住民たちは、外部の他者に転換させられる。もともと相対的であった位置関係が暴力的関係をもとに絶対的なものとして定まった時点においてのみ、勝者の側から敗者を名指す言葉として「蛮人」という呼称が成立することを注意すべきであろう。「蛮人」たちの側から見れば、自分たちの領分に勝手に入り込んで自分たちの殺戮を無意味に繰り返すヨーロッパ人の側こそ、「野蛮」を体現していることになるはずだろう。だが、この意味での野蛮、つまりヨーロッパ人を指す意味で野蛮という語が、勝者のイデオロギーが支配する世界に流通する見込みは、もはやありえないのである。

勝者と敗者の関係が定まったことによって、ヨーロッパが内部で先住民たちは外部へと転換した。その帰結は大きい。少なくともロビンソン・クルーソーの島では、「蛮人」たちは敗者の烙印を押されてその結果を押し付けられ、島の中でヨーロッパ人の側が力によって正当性を握ったことになる。力を持つことが、すなわち正義。ロビンソン・クルーソーが最終的に島を離れる時点において、島に足を踏み入れた「蛮人」たちは殺されたか、奴隷の身分になって屈従しているか、どちらかである。

b. 暴力の回路

ロビンソン・クルーソー物語において、それらカリブ族の人々が双方向のコミュニケーションをそもそも受け入れない、ヨーロッパ的な価値と対極にある暴力的な人々として物語の最後まで表象され続けていることを見ておこう。このことも「冒険」の場合と同じように言説構成の次元で説明を試みることができる。すなわち、海を境界としてヨーロッパと隔てられて住むコミュニケーション不能の他者、そういう対比された関係が、ロビンソン・クルーソー物語の「言説を組織する重要な装置」(酒井p.4)となっている。この装置を用いれば、「冒険」の場合と同じくいつまでも好きなだけ物語は続くことが可能である。ロビンソン・クルーソーが最終的に島を去ってブラジル経由で東インドに向かうときでさえも、彼は海上でそれらの先住民と遭遇し、コミュニケーションがまったく成立しないまま、海上の「戦争」に巻き込まれているのである。

彼の島とそれらの人々は、海をはさんであたかもヨーロッパとその他の地域という地政学的な関係となっているが、先にも述べたとおり、ロビンソン・クルーソーはそもそもその領域への侵入者であった。にもかかわらずその島と島以外は、海を境界にしたヨーロッパと他者の関係として読めるようになってきている。彼がその島に到着してすでに24年間が経過して、島の地表に彼の手がかなり加えられたあとで先住民との遭遇が始まるからであろう。その島の実質的な「住民」として24年間そこにいたという物語上の事実は、読者であるヨーロッパ人に対して島に対する彼の「既得権」を納得させるのにおそらく十分な期間であっただろう。彼はその島を王国にみだてた「王様」のようであり、すでに島には彼の手を加える行為をとおしてヨーロッパがすみずみまで浸透していた。彼が細々と描写する島の様子も、その浸透作用に加担している。彼がそこで24年間暮らしたということは、カリブ族がやってくるまでの前段階として、ヨーロッパとそれ以外を対比する言説の装置を準備するために重要な役割を果たしている。

彼らがどこからやってくるのかについては、物語の最後になっても、詳

細はまったく明らかにされない。かつてコロンブスは最初の航海時から島々の中の位置関係にかなりの注意を集中し、地理学的に把握しようとしており、その航路はほぼ推定されている（たとえば岩尾（1999）が述べているように）。ロビンソン・クルーソーの場合、彼は嵐に巻き込まれてその島に漂着し船を失ったのであるから、周辺の島の配置や位置関係については当初から正確な知識がないのは仕方がない。しかし、彼が物語の第二部で島を再訪したときでさえも、すぐには島にたどり着けないくらいであり、たどり着いた後でも彼は大陸や他の島との位置関係は明確に把握していないし（下45）あまり知ろうという意欲もない。というわけで、そのカリブ族の人々は海からやってくる。あたかも海から湧き出てくるかのように、得体の知れない不気味なものとして、その島に姿を現わす。

結果として、それらの人々が生活しているはずの土地と、その島と、それらの両者を包括する空間については、ロビンソン・クルーソーにとっても読者にとっても、固有な空間として何ら概念化がなされてない。カリブ海域はヨーロッパ人が進出したことによって、固有のヨーロッパでもなく、固有のカリブ海域でもなくなっている。ヨーロッパ人とカリブ族を両者とも含めた新奇な空間となるべき可能性を秘めていたはずである。だが、彼が島を離れるときになっても、島の内部全体を「社会（society）」や「共和国（commonwealth）」として概念化することはあっても、島と島の外に住むそれらの人々を含む社会的空間の成立は構想されない。複数の人間が住む社会としては、島の内部だけに限定してあくまでもヨーロッパ的社会として構想されており、カリブ族がその中に入れば、殺されるか、または奴隷となるしか占有すべき地位はない。その社会の構成員としての地位は与えられないのである。仮にロビンソン・クルーソーの24年間を「既得権」として先住民が認めるとしてさえ、ヨーロッパ人と先住民を包含する、ヨーロッパ社会とは異なる新奇で固有な社会的空間を生み出そうという意思是、このヨーロッパ人の側にはない。あるのは、ロビンソン・クルーソー（ヨーロッパおよびその社会）と、どこか別のところに住んでいるらし

カリブ海とロビンソン・クルーソー物語（４）

い他者（蛮人）という対比だけであり、物語の言説はこの「装置」によって強かに支配されている。

ロビンソン・クルーソーは「冒険」によって海を越えヨーロッパからその海域へ侵入してきた。ポストコロニアル的契機を経過した今日では、それらの住民が「先住民」であることに何ら疑問の余地はない。カリブ族を含むこれらの先住民に対しヨーロッパ人は殺戮行為を繰り返し、それらの人々がほぼ絶滅したことも歴史的に疑いが無い。以前からそこに住んでいた人々の内側に、ヨーロッパの方が外側から侵入したのである。カリブ海のロビンソン・クルーソー物語はそういうヨーロッパ人侵入者の視点を中心に据えた物語の系列に属することを確認しておくべきなのだ。最初の暴力はヨーロッパの側が犯している。しかも、ロビンソン・クルーソーが船から運び出して使用するようになったように、ヨーロッパは銃という火器を操るといふ点で、インディアンたちに対して圧倒的な力の優位に立っているのである。

c. nation

この物語でロビンソン・クルーソーがそれらの先住民の存在をヨーロッパ人ではない人間的な存在として意識した後で、彼がそれらの人々をカリブ族という集団としての同一性を認めて呼ぶために用いる語がnationである。この語は、それらの人々について彼がフライデイと会話をするようになると二人の会話のなかに頻出する。フライデイはその語の意味が彼の属するカリブ族を指示する語として理解しているようで、二人の間にはその語の意味を共有してコミュニケーションが成立しているように見える。オックスフォード英語辞典（OED）によれば、新大陸の先住民インディアンの下位集団を表わす語としてnationが文書で最初に記録されたのは1650年のことであった。‘Indians of several nations’という言い方である。1632年にヨークで生まれ、1651年に船に乗り込んだというロビンソン・クルーソーの物語にその意味でnationが用いられるのは、まだ新しい語感があ

ったであろう。

このnationという同じ語はロビンソン・クルーソー物語の他の箇所でもフランス人やスペイン人を集合的に指す語としても用いられる。カリブ族の場合と、そしてフランス人やスペイン人の場合とを、同じnationという語で指し示すことになる。当然のことながら、何らかの標識を用いてそれらの異なる集団を相互に区別する意識が生み出されるであろう。一方でアメリカインディアンに属するひとつのnationとして言及される集団があり、その集団に付加される属性と、別のヨーロッパ人集団の属性との間には、対比の意識が生まれることになるだろう。

たとえばロビンソン・クルーソー物語のなかで、フランス人については次のように言及される。「彼らがその一部をなしている国民(nation)の、つまり、フランス人という国民(nation)の特殊な事情が、何がしかの関係をもっていたかもしれなかった。何しろ、フランス人の性格は、他国民の性格以上に、気紛れで感情的で陽気で、その心も変化しやすいと一般にいわれている」(下27)。

邦訳ではこのように「国民」と訳されているが、nationという語は、この物語が書かれた18世紀の前半世紀において必ずしも近代的な意味の「国家」を構成する人々を表わす語彙として明確に確立していたとはいえないだろう。ここでフランスのnationといわれている人々は、今日もフランス人として呼ばれる人々にほぼ重なると思われる。そういう集団は確かにあっただろう。歴史的に言えば、そのnationを基盤にして18世紀末から19世紀初めのころ政治的に重要な近代的「国家」(state)がつけられるようになったので、そのあとではnationとstateがほぼ一致するようにする方向で近代的な世界秩序の模索が行なわれた。今日では、nation-state、日本語で「国民国家」や「民族国家」という言い方ができるのもそのためである。

ロビンソン・クルーソー物語でnationが用いられる場合、今日でいえば「国籍」があるような「国民」を表わすわけではない。確かにフランスに

王国はあり、フランス国王（King）はいただろう。だが、フランス人と呼ばれる人がすべてフランス「国籍」を持ち、国家によって一人一人にいたるまで管理されるべき「国民」であったかどうか、「フランス国民」が政治的集合体として存在していたかどうか、それはまだ明確でない時期にあたる。それを言うならば、イギリスの方がnationとしてはもっと未分化である。ロビンソン・クルーソー自身、母親はイングランドのヨーク出身だが、父親はドイツのプレーメンに生まれてイングランドに移住してきた男子だったのだ。

かくてロビンソン・クルーソー物語において、nationは漠然とフランス人を表わすと同時に、「カリブ族」（上288）のような集団を指しても用いられる語である。このnationがカリブ族を表わすことが明確な場合には、邦訳においても「種族」という訳語があてられる。新大陸の先住民は全体としてインディアンまたはインディオと呼ばれる。ロビンソン・クルーソー物語の中で「インディアン」という語は用いられているが、それらのインディアンをすべてまとめてヨーロッパの白人やアフリカの黒人と対比する概念は用いられていないように思われる。モンゴロイドに属するとされるインディアンを全体としてまとめて呼ぶ場合は今日ならばraceにあたるであろう。これは日本語では「人種」であるから、nationがフランス人やスペイン人を指すときには、国民というよりは今日でいう「民族」という語があてはまるであろう。

d. 'civilize' という一方通行の回路

ロビンソン・クルーソーがフライデイと名づけた先住民の青年がいる。その青年はどこからともわからない海のかなたから、他の数人の先住民に連れられてその島にやってきて、海岸で人肉食の饗宴であやうく犠牲になろうとしていた。ロビンソン・クルーソーが偶然にもその場面を目撃することになりその青年の命を救ったのである。それをきっかけにして二人はフライデイが死ぬまで決して離れることのないパートナー関係になる。ロ

ロビンソン・クルーソーが最終的にその島を離れて東インドをめざす航海に出発するときになると、フライデイは戦闘中にあっけなく命を落とすが、物語の次元から言えば、そのときフライデイはもはやこの物語の進行のために必要がなくなったのである。

二人の間には、ロビンソン・クルーソーと先住民集団の間で発生するような暴力的な関係はない。二人が相互に戦うことはなく、二人の間には二人が共有する空間が成立する。その島という空間である。それは複数（二人だけだが）の人間で構成される社会的空間でもあるが、その特徴は一方通行の人間関係と言うべきものである。物語のなかで用いられる言葉を用いるならば、すでにcivilizeされていると仮定されたヨーロッパ人ロビンソン・クルーソーが、civilizeされない、つまり「蛮人」であるカリブ族のフライデイを、「教化する(civilize)」という関係である。Civilizeとはどういうことか、どんな状態になればcivilizeされたことになるのか、そういうことはこの物語では重要でなく、civilizeされているか、されていないか、その二分法思考を間において、ヨーロッパ人とカリブ族の間に成立する対比的関係が重要である。

このcivilizeという語は、彼が最初に漂着して島で生活をしている間にはまだ用いられておらず、物語の第二部、*Farther Adventures* になってからはじめて用いられるようになる。この物語で最初にその語が出現するのは、ヨーロッパ人たちがカリブ族の若者たちを捕虜にして「奴隷」の身分に追いやり、島で強制労働をさせることにしたことの関連である(下77)。ヨーロッパ人たちはその際、奴隷である先住民の若者たちを「教化する」(civilize)ことはなかった、というわけである。そのヨーロッパ人たちの蛮人の処遇の方法は、以前にロビンソン・クルーソーがフライデイを遇した方法ではなかったというのである。ロビンソン・クルーソーがフライデイに与えたような「教化(civilize)」とは、「まず最初に三人の命を救ってやったという根本的な点をたたきこみ、次に人生の理性的なもろもろの原理を教えこむ」ことをして、「宗教の原理を教え」(宗教とはキリスト教の

ことだ）「親切にとり扱い諄々と論じ合うこと」である（下77）。これはすなわち、ロビンソン・クルーソーがかつてフライデイに対して行なったことをそのまま述べたものだという。

続いてcivilizeという語が用いられるのは、島の周辺に居住するカリブ族インディアンたちがヨーロッパ人との接触の結果として、「インディアン、つまり蛮人たちは驚くほど教化されていた（The Indians were wonderfully civilized by them.）」と言われる箇所である（下129）²⁾。ここで言われているのは、そのインディアンたちが従順になったというにすぎない。ヨーロッパ人が与えた命令、すなわち、その島に暮らしているヨーロッパ人たちのところに来てはならないという一方的な命令（下129）を、インディアンたちが内面化して素直に従うようになったということである。

次にcivilizeが用いられる箇所は、スペイン人が奴隷のインディアンたちのことを述べたものである。「彼ら[スペイン人のこと]は、一緒に住んでいた蛮人たち（savages）を教化し（civilize）、人間らしい普通の生き方をするのに必要な、理性にかなった習慣を教えようと八方手をつくして努力したが無駄であったそうである」（下136）。これは先に述べた二分法思考が究極にたどり着いた地点であって、あちら側に追いやられた「蛮人たち」はもはや人間ではないとまで言われそうなけはいである。彼らカリブ族の人間は殺すか、奴隷にするか、どちらかしかないという結論は、すでにロビンソン・クルーソーの思考で暗示されていたのであるが、civilizeという語を焦点としてあらためて確認されている。

ロビンソン・クルーソーを含むヨーロッパ人たちと、インディアンたち。両者の間にそのような「教化する」という関係が成立する場合には、その最初の段階で暴力の関係が存在した。現在は、その暴力の応酬に決着がついて、ヨーロッパ側に根本的な優位が確立した状態である。そういう歴史的経緯があってこそ、優位な者から劣位な者に対して「蛮人」という呼称も成立する。そうして成立した社会的関係のなかで究極の不平等の関係を表わすのが、主人対奴隷という関係である。実際、カリブ族の男たちはフ

ライデイを除いて最終的に島で奴隷の身に追いやられていている。

フライデイの場合、ヨーロッパ人の欲望が投影された人物として形象された結果として、自発的な奴隷（語義矛盾だが）である。カリブ族の一人であるフライデイは人肉食の饗宴で生け贄にされかけていたところをロビンソン・クルーソーによって命を救われた。フライデイはロビンソン・クルーソーに対して「生命」にかかわる恩人という特別な関係にあるとされ、その事実こそが以後の二人の関係を規定しているというのである。恩義を知るというフライデイのふるまいは、ヨーロッパ人にも納得がいくという印象を与える。フライデイの方でも、ロビンソン・クルーソーに対する恩返しをする意志があると、ロビンソン・クルーソーは解釈している。フライデイが見せた身振りを彼はそういう意味に受け止め、以後のフライデイの行動もその期待を微塵も裏切らない。

これらの場合に言われている civilize は一方通行の関係と言うべきであろう。ロビンソン・クルーソーやスペイン人たちがヨーロッパから運んできた文化を、先住民である「野蛮な」インディアンたちがすべて受け入れるよう強制される、あるいはフライデイのように自発的に受け入れるという関係である。ヨーロッパの側の言い分は、「人間らしい普通の生き方をするのに必要な、理性にかなった習慣を教える」（下136）ということであり、自分たちの「習慣」が人間に普遍的であるというように装っている。フライデイという英語の名前を与えられたその青年は、裸で生活することをやめさせられ、衣服を与えられる。想定される人肉食嗜好に否定のメッセージが発せられる。語学学習者となって英語を習得する。ペナマキーという独自の信仰対象を否定され、「真実な神についての知識（the Knowledge of the true God）」（上289）を教えるとして、キリスト教徒に改宗することが求められ自発的に応じる。

境界という観点から言えば、二人の間に存在していた文化的な境界を消去しようとする方向に力が働き、フライデイの方でも、その強制について疑問をさしはさむ様子はまったく見られない。フライデイに具現化される

のは、自分の生まれ育った伝統に対する全面的な否定という屈辱的態度である。フライデイこそは、領土を拡張しつつあったヨーロッパ人が抱いた欲望の投影として、「蛮人」の処遇を正当化するための強力な形象となっているだろう。コロンブスは出会った先住民たちについて第一回航海の記録に「よいキリスト教徒になるであろう」と記した。まさにコロンブスのその予言が実現されたかのように、フライデイは敬虔なキリスト教徒になるのである。

3. Commonwealthとしての島

ロビンソン・クルーソーは島を一旦立ち去ることになるが、彼が島に戻ってからも住民の数は増えていき、最終的には子どもも含めると百人前後の多くの人々が住むようになる。そのようになった島の様子を表わすために彼が用いる言葉がcommonwealthである。この言葉はロビンソン・クルーソー物語のなかで一度しか用いられていないが、島の住民の数が増大していくなかで、人間的な社会（society）が出現した場合の島全体の社会的関係について包括的に述べた言葉としては唯一のものであると思われる。ロビンソン・クルーソー物語というと、島での孤独な人間の生活の物語という側面のみが注目されるようになってしまったが、それは誤りなのである（その他の部分を隠蔽しようとするイデオロギー的操作があったとさえ疑惑を抱かせる）。複数の人々が住むようになったその島の社会をひとつの政治体として構想し書いているのではないかと窺わせる部分がかかなり大きい。いわば、新しくヨーロッパ人の視野に入って可能性を見せ始めていた新しい空間を舞台として、作者によるひとつの思考実験のようなものが繰り広げられるのである。

彼が島にひとりで生活していたころ、自分のことを領主や、王様、皇帝、専制君主、立法者などに喩えていたことは確かであるが、島を再訪して増大した人口を目の当たりにした彼はもはやそのようなことは言っていない。

島内に限定されるとしても、曲がりなりにも commonwealth という、いわば公共的な空間が成立したと書いていいだろう。イギリス史で commonwealth とはピューリタン革命でチャールズ 世が処刑されたあとチャールズ 世が即位するまでの政治体制をいう。また、今日のアメリカ合州国を構成する州のなかでも、比較的初期に成立した Massachusetts, Pennsylvania, Virginia, Kentucky は州という政治体としての公称語に commonwealth を用いる。ロビンソン・クルーソーは、人口の増えていく島を人間の政治体として捉えて commonwealth と言い表したと書いていいだろう。いったいどういう政治体なのか。

a. 起源神話

その島では人間関係の根本に、起源の神話とでもいうべき物語が埋め込まれている。その島でロビンソン・クルーソーが他の人間と共同生活を始めるとき、その相手となる人々はいずれも彼を「生命の恩人」(上341)だという。そういう関係を生み出す最初の物語が過去に置かれているのである。人間が共同生活をするうえで、島に住むことになるそれらの人々は、カリブ族であるフライデイも含めて、その起源をいつになっても忘れないことになっている。

このようないわば「恩義」(上300)にもとづいた人間関係は、この物語で想定されているイギリス人、スペイン人、フランス人などのヨーロッパ人、そしてカリブ族、これら人間の境界を超えて有効性のある自然的な意識であり、時間を越えて持続するという前提がある。そのような有効性と持続は、おそらくは根拠のない思い込みであろう。ひょっとしたら、海を越えて地球上の各地に進出しつつあったヨーロッパ人の側の願望であったかもしれない。にもかかわらず、その思い込みを疑問視することなく物語は進行する。

その島で人々はロビンソン・クルーソーに対する恩義をけっして忘れないことになっているのである。まずフライデイの場合。彼はカリブ族イン

カリブ海とロビンソン・クルーソー物語（４）

ディアン部の部族間の抗争で捕虜となり、その結果として行なわれる人肉食の饗宴で犠牲者となりかけて逃げ出したところを、ロビンソン・クルーソーに救われた。そういう意味で命の恩人である。フライデイはいわばこの物語で「恩義」と「忠実」という本質の具現化として登場しており、生きた人間としてのリアリティに欠けているのは当然であろう。次には一人のスペイン人。最後までそのスペイン人の固有名前は表記されないが、やはり、カリブ族の捕虜として島に連れてこられて殺されかけたところを彼の手によって救われ、その恩恵を忘れない。そのスペイン人と同時に命を救われたのが、偶然にもフライデイの実の父親である。これらの三人についてロビンソン・クルーソーは、「彼らが生きているのはみな私のおかげ」（上322）であると言う。その後、島の近くにイギリス船が姿を現わして停泊する。その船内では叛乱が起こって、船長、航海士、船客一人が島に置き去りにされることになり、強制的に島に送られて来る。ロビンソン・クルーソーがその三人を救い出すと、その船長がやはりロビンソン・クルーソーに向かって「生命の恩人」（上341）と言う。

ロビンソン・クルーソーは島に他の人間が暮らし始める以前、孤独で過ごすその島を領土に見立てて自分がその島の「領主」や「王」、「皇帝」（上175）であると言っていた。住民がひとりもいないところで領主や王というのも不思議だが、三人と共同生活を始めたあとにも、自分を領主、王、皇帝にたとえる。それら三人は彼にとって「人民」（上322）であり、「家来」「臣民」（上322）であった。自分は「専制君主であり、また立法者であった」（上322）と述べる。島に住む住民全体をさして「家族」（family）と言う場合もある（上328、下57、77、81、93、149など）。

ロビンソン・クルーソーはこれらの人々の間に最初の「恩義」にもとづく秩序を形成して、島のなかの社会的な人間関係を構想しようという願望があるように思われる。とすれば、「恩義」はそれを根拠にして人間関係を打ち立てる自然的な人間の本質というよりは、恩義をほどこす立場になりうる側が政治的に勝ち取るべき権利を保障するための装置ということに

なる。その恩義をあたかも自然的な本質であるように見せているには、権力側のイデオロギー操作なのである。

ロビンソン・クルーソーを名指す言葉としてはもうひとつgovernorが用いられる(下58他多数)。邦訳では「統治者」「首領」や、ときには「隊長」「指揮者」(下69)などが当てられて定まらないが、これは今日では合州国の州知事を指す語でもあり、島全体が「植民地」にみだてられる場合があるように、一般的に植民地時代においてその土地を統括する立場の地位に与えられる名称であり、植民地の場合は「総督」、合州国の州では「知事」と訳される。そのgovernorの名称が別の人物に与えられるのは、ロビンソン・クルーソーが島を離れているあいだのことで、彼が命を救ったスペイン人が島の統括者的な立場を担ってその称号を継承する。このスペイン人は島の「領主」であると主張するロビンソン・クルーソーが島を離れると彼に代わってずっとその称号を保持し、政治体として成立したその島のgoverningを行なうのである。

ロビンソン・クルーソーが自分を領主といひ総督としての地位を占有することの正当性は、彼がその島に最初にたどり着いたこと、島内に住むその他の人々の「生命の恩人」であることに由来すると考えられており、彼のみならず、その他の人々も認めている。(島が誰のものかについては、第 章を参照)

b. 人種と民族

その島の住民たちはどんな人々で構成されているか。ロビンソン・クルーソー物語には今日でいう白人(ヨーロッパ人)、黒人(アフリカ沿岸を航海したときに見かける、また彼は黒人奴隷を買うためにギニアに向けて出航して嵐に会う)、そしてモンゴロイド(インディアン)という人種が登場するが、現在でいう「人種」の概念があるかどうかはこの物語からはわからない。確かにアフリカ沿岸で見かけた人々の皮膚がblackであると述べているが、白人、黒人、黄色人種などと、皮膚の色で人間に境界を

つくろうとする様子はない。黒人たちの住むサハラ以南のアフリカは確かに奴隷の供給源とみられているが、黒人はつねに negro と呼ばれており、皮膚の色がその人々を確認する標識とはなっていないようだ。ただ、フライデイの様子を描写するときに、「皮膚の色はまっ黒というわけではなく」（上275）と述べるなど、黒人との違いを表現している。

また、それらの人々の間に区別をするための語として race は用いられておらず、一度だけ用いられる race は、スペイン王国について言及している a race of Men であり、スペイン王国に住んでいる人々が、「高潔な心のしるしとされている同情の精神、哀れな者にたいする人間共通の憐れみの念をもたない人間」（上233）たちであるというもので、人間の「種類」とも言えるような一般的な意味の言葉にすぎない。

とはいうもののその島は社会的な地位が歴然としており、結果としてその地位の違いは今日でいう人種の違いと一致していることも確かである。すなわち、ヨーロッパ人とは異なる人種に属するインディアンたちは「蛮人」であり、奴隷である。インディアンたちが奴隷とされているのは今日でいうところの racism にあたるだろう。しかしロビンソン・クルーソー物語において彼らが奴隷になるのは、ヨーロッパ人との特定の暴力の応酬に負け続けた結果の屈従であって、人種主義があらかじめ存在していた結果ではない。そもそも人種主義にあたる racism という言葉はロビンソン・クルーソー物語にはない（OEDによれば1936年初出である）。インディアンと黒人が奴隷、白人が主人としてあらかじめ差別視する通念があった結果として彼らが奴隷になっているわけではないのである。白人であるロビンソン・クルーソー自身も、初期の航海でトルコ海賊船に襲われて捕虜となり、モロッコのサリーに連れていかれ奴隷の身分になる。この物語の世界では、戦いや暴力の現実があり、その結果として奴隷にされる人々がいる、ということなのだ。

この物語の描く近代初期の世界では、やがて全世界を巻き込んで進行することになり今日までも尾を引いている近代的人種主義は、いまだ必ずし

も明確な姿を現わしていない段階である。ロビンソン・クルーソーがブラジルの農園で労働力を確保する目的で奴隷を調達するためにアフリカに航海する決定をしているのは、その兆候と言っていだろう。「劣等有色人種の刻印を押された黒人とインディアンは奴隷身分にふさわしい人種とされた」(池本・布留川・下山84)というような、もっと明確な近代的人種主義が発達するには、ロビンソン・クルーソーの時代からもう少し時間が経過して、地球的規模で産業の再編成が行なわれるようになり、人種の観念がその産業再編過程に組み込まれることが必要である。「人種というのは……実際は生物学的な人間の種類による区別などではない。むしろそれは安価な労働力を抽出するための手段なのである」(川北101)。

今日でいえばethnicityで表わされる「民族」の概念については、ロビンソン・クルーソー物語では先に見たとおりnationという言葉が用いられている。この物語のなかではethnicという語は用いられないので、nationという言葉が今日の日本語でいう「民族」「国民」などにあたるだろう。アメリカインディアンの「種族」(tribeにあたる)の意味でもnationが用いられることはすでに見たとおりである。

ロビンソン・クルーソーの島では、フライデイを最初としてこれらのnationの違いであらわされるさまざまな人々が混在して住むようになる。彼が最初にフライデイと二人の共同生活を始めたときには、フライデイは命を救われた奴隷というよりも、相手が命の恩人であることを自分で認識していることを根拠にして、自発的に服従をする者として描かれているが、前にも述べたとおり、ヨーロッパ人の欲望が投影された産物であることは明らかであろう。今日フライデイといえは現実にはありえない「忠実な召使」の意味で用いられるとされているとおりだ。フライデイの後に島にやってきたインディアンたちは、フライデイの父親は別として、奴隷の身分にされている。

その他にも異なるnationとしてのイギリス人、スペイン人、フランス人がいる。彼らは同じヨーロッパ人として相互に社会的格差は設けられてい

ないようだが、ヨーロッパ人のあいだに違いがあるとすれば、最初にその島に定住して先着権をもつ人物としてのロビンソン・クルーソーが維持する特別の地位である。彼は彼の次に島にやってきたヨーロッパ人であるスペイン人に対して「命の恩人」として、恩恵の起源として振る舞っている。その後に来たヨーロッパ人に関しても、その島のなかの社会的関係は彼の最初の恩恵から始まるとされているのであって、その恩恵こそが島における社会的関係において、唯一の正当性の根拠となっている。（島の所有関係についても前に見たとおりで、彼が最初の発見者であることにより正当にその島は彼のものとされており、彼が臣民であった英国王の王権は問題にされていない。）

c. 宗教

宗教についてもロビンソン・クルーソーは言及し、そこに住んでいる三人の「臣民」がそれぞれ、「プロテスタント」（キリスト教徒に改宗したフライデイのこと）、「異教徒で食人種」（フライデイの父親）、「カトリック」（スペイン人のこと）であり、彼は「自分の全領土を通じて信教の自由を許していた」（上322）と語る。これは彼がその島を脱出する前のことであり、王や専制君主、立法者になぞらえた自分も含めて4人しか住んでいないときのことである。彼が島を再訪してみるとそこには多数の人々が暮らしていたので、彼が連れて行った人々を含めると島の人口は大人が73人、加えて子どもが20人くらいである。これらの住民の宗教的信条は、プロテスタント（イギリス人）、カトリック（スペイン人とフランス人）、異教徒（先住民）と色分けされる。

これらの宗教的混成とそれらの間の調和がその島の特徴である。キリスト教と異教との間には厳然とした境界が設けられている。ロビンソン・クルーソーが最初に会ったカリブ族のフライデイに対して、彼は彼の宗教的情熱を傾注して改宗させようと試み、成功する。すなわち、ヨーロッパ人がカリブ族をcivilizeするという関係である。しかしその後は彼の情熱は

急速にさめて、フライデイの父親は異教徒のままに放置される。

その島の社会は、作者デフォーが旧大陸で直面していたような、カトリックとプロテスタントの宗教的な対立とは無縁である。島にやってきたフランス人とロビンソン・クルーソーの初期の対話からは、旧大陸における宗教的対立を十分に窺わせるところがある。しかし彼はそのカトリックの聖職者と約束して、「蛮人を説得してキリスト教徒に改宗させるに際して、カトリックとかプロテスタントとかの区別を少しもしないこと、ただ真実な神と救主イエス・キリストについての一般的な知識を教えること」(下207)にするのである。このような宗教的寛容、カトリックとプロテスタントの間に境界を設定しない態度は、旧大陸では考えられないような事態として構想されていたであろう。新世界に構想された新しい政治体としての合州国の基本方向を定めたアメリカ合衆国憲法における「信教の自由」とも響き合うものかもしれない。

注

1. これは今日も「文明の衝突 (the clash of civilizations)」論 (ハンチントン) として続くヨーロッパ側の考え方として受け止めなければならないだろう。2003年にアメリカ合州国がイラクを攻撃した際にも、イラクが大量破壊兵器を実際に所持していたかどうかは問題ではなく、でっちあげでもかまわなかったのである。
2. 1971年の邦訳ではIndianという語を「インディアン」と訳したうえで、原テキストにない「つまり蛮人たち」と付け加えている。インディアン=蛮人というわけなのだ。第二次世界大戦後に日本語発話者が陥った落とし穴の兆候であろう。

引用文献

- 池本幸三・布留川正博・下山晃 『近代世界と奴隷制 大西洋システムの中で』人文書院、1995年
- 岩尾龍太郎 『浮遊する食人種記号 コロンブス 『日誌』を読む』、『思想』(No.897, 1999年3月) 所収
- ウィリアムズ、E. 『コロンブスからカストロまで カリブ海域史、1492 - 1969』(I, II), 岩波書店、2000年
- 川北稔 『ヨーロッパと近代世界』放送大学教育振興会、2001年
- 酒井直樹 『死産される日本語・日本人 「日本」の歴史 - 地政的配置』新曜社、1996年

カリブ海とロビンソン・クルーソー物語（４）

- デフォー、ダニエル、平井正穂訳 『ロビンソン・クルーソー』（上、下）岩波文庫、上1967、下1971年
- 富山太佳夫「解説2 航海、帝国、ユートピア」、『ユートピア旅行記叢書2 17世紀イギリス』の解説、岩波書店、1998年
- ハンチントン、サミュエル 『文明の衝突』集英社、1998年（原題 *The Clash of Civilizations and the Remaking of World Order*）
- ワット、I. 『イギリス小説の勃興』鳳書房、1998年
- Hulme, Peter and Whitehead, Neil L. (ed.) *Wild Majesty: encounters with Caribs from Columbus to the present day, An Anthology* (Clarendon Press, 1992)
- Jahoda, Gustav, *Images of Savages: Ancient roots of modern prejudice in western culture* (Routledge, 1999)